

藤中 寛之

12月10日、折尾駅北口のイベント会場で「灯明 de X' mas2011」が開催された。

地元の幼稚園・保育園の子どもたちによる、解体される折尾駅舎の塗り絵が展示され、紙袋でつくった灯明（約3200個）による地上絵が出現した。この地上絵は、縦が約36m、横が最大約25mになる巨大なもので、折尾駅舎の丸イスで男女が出会う絵などが描かれていた。製作者によれば、この地上絵は「折尾駅の再会」と題し、この男女の出会いと、地上絵を見ている観覧者が、折尾駅で経験した様々な出来事に思いを馳せ、再び折尾駅（の思い出）に出会うこととかけているとのこと。少し薄暗くなってきた17時頃、会場にいた約30名で灯明に点灯し、東筑高校の吹奏楽部がクリスマスソングやAKB48の「会いたかった」などを演奏した。

主催者のおりお未来21協議会によれば、このイベントは“おりを”を象徴する特徴的な外観の折尾駅舎が解体されるまでの間、折尾を見守り続けてきた“駅”に感謝の思いを伝える「おり博」の活動の一環とのことである。

私は、折尾のまちで育ち、生活している地方自治の研究者として、折尾駅舎が解体されることになった過程に強い憤りを抱いており、抜本的な市政改革の必要性を痛感している。

その過程とは、私たちの自治体であるはずの北九州市は、議事録を公表しないおりお未来21協議会の「折尾まちづくりビジョン」の提言を踏まえるとして同協議会と協働し、折尾駅舎を解体する基本方針を策定したものの、即座に同協議会担当部会長の尾道教授から「スクラップアンドビルドは時代遅れ、現駅舎を生かし、新旧を調和させた開発方法を再検討するべきではないか」（「西日本新聞」2009年7月2日）と反論されている。

次に、同協議会は折尾駅舎の文化財としての価値の詳細な検討が必要として、提言にて「現在の折尾駅舎は、文化の保存を主目的とする地域の人々が活用できる『生きた施設』として保全することを優先する」と明記している。これと同様に、市の文化財保護審議会や産業考古学会から、駅舎の文化財としての価値を調査すべきとの要望が市教育委員会に提出されたが、市教育委員会は会議の議題にもせず、元市職員の教育長の判断で文化財的価値の調査をしない考えを示した。しかも文化財保護審議会において係長は、文化財調査をして価値があるとなった場合、管理の経済的な目途が立っていないとの本末転倒の理由で調査に難色を示している。私は、これは文化財保護法に抵触する恐れがあるのではないかとと思う。

第三に、たび重なる折尾駅舎保存を求める市民の署名活動や学会・市民団体の陳情などを受けて開催された市議会の委員会の中では、市議から「駅舎をそのまま残すことが重要であり、解体してシンボリックな部材のみを残して複製したとしてもレプリカに過ぎない」として、同協議会以外の住民の意見を聞く必要性や、市民団体の駅舎の曳家案等の対案について費用の見積もりをすべきとの意見が提起された。しかし、結果的に市の担当部局は、同協議会を「地元」として駅舎解体を検討しており、周辺工事も進んでいるので市の基本方針を理解してほしい、と開き直っている。そのため市議会の委員会では、現在でも折尾駅舎の問題は継続審査となっている。

一方、直方駅舎の保存運動は住民訴訟となり、不十分で問題が多いが文化財価値の調査がなされ、折尾駅舎よりはオープンに議論されていると思う。今回、私は折尾駅舎の保存を求める署名活動や清掃、ライブ、情報開示請求等を行った。そして、この直方の事例と共に、「情報共有の仕組み」や「市民参画の制度の整備」を規定した北九州市の自治基本条例を折尾駅舎の保存や開かれた議論、住民の合意形成に活かすことができないか調査し、市の担当者と討議した。しかし、現状では大勢に影響をあたえきれていないが、今後、多くの方々と共に折尾駅舎の活かし方を模索し、本当にみんなが納得できる、市民主体のまちづくり、市政改革を実現していきたい。